

令和2年 秋季号 令和2年11月23日発行

鹿児島大学農学部 あらた同窓会 学生会員向け会報

電話 099-285-8537



農学部から見た噴煙流れる桜島と月







化学実験風景(食料生命科学科)



土の一軸圧縮試験(農林環境科学科)



ライチの取り木(指宿植物試験場)



サトイモの収穫(指宿植物試験場)

目 次

	巻頭言「コロナ時代、君は何に挑戦するか」			田	亚	輔	2
2.	「鹿児島大学農学部の地域貢献と人材育成」		·橋	本	文	雄	3
	「遠隔授業どうですか?」				清	貴	4
4.	鹿児島大学農学部「あらた同窓会」の活動について		·事	利	Š	局	5
- 4 - 4							
	・キャンパスライフ						
	業生産科学科						
5.	応用植物科学コース	W. L					_
	「自己成長の場:鹿児島大学」果樹園芸学研究室	学部4年・	窪	Ш	瑛	水	6
6.	畜産科学コース ウェイス マー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	W 44 . E4	mz			-11-	
_	「我が身を振り返ってみて」 家畜管理学研究室	字部 4 年・	野	島	舞	枼	6
7.	食料農業経済学コース	W 4	T	-	.L.11.		_
	「無題」 農業経済学研究室	字部 4 年・	偣	Ш	耕	平	7
	科生命科学科						
8.	食品機能科学コース	兴 杂 4 左	1.	t. t.	7.11.	→	_
0	「私の4年間」	字部 4 年・	不	村	桃	十	7
9.	食環境制御科学コース	W +P 0 F	,.t.,	ı⇔	,	T##.	0
10	「もやしもん」から植物栄養・肥料学研究室	字部3年・	鬼	琢	大	推	8
10.	焼酎発酵・微生物科学コース 「初めての一歩、そしてこれからの一歩」 …焼酎製造学研究室 修士2年・Chris	トファー イマ	ンサ	ントソ	ا ا	バ	_
	「初めての一歩、そしてこれからの一歩」 …焼酎製造字研究室 修士 2年・Chris	stopher Ima	ansai	ntoso) Kin	ıba	8
画 典-	林環境科学科						
	森林科学コース						
11.	「秒だった大学生活」森林計画学研究室	学动 4 年 .	. iih	àП	恶	太	0
19	地域環境システム学コース	子即4十	{E	UC	发	沤	9
14.	「嗚呼素晴らしき台所」農業環境システム学研究室	学 郊 4 年 .	连	-dv	垂	工	٥
	祭食料資源学特別コース(農学系サブコース)	子即4十	仴	八	=	人	9
12	「自分革命から深い感謝の気持ちを持ち生きている」…熱帯作物学研究室 学部3年	グェン ・NCUVEN	ティ (ヤロ)	トゥ 'TUI	TUA	ン NC	10
15.	日ガ半叩が9体へ窓跡の気持ちを持ち生さくべる。 窓市下物子明九至 子叩り子	NGUIEN	1 111	. 1110) 11 <i>T</i> 1	.IVG	10
教育	美習奮闘記						
	「母校での教育実習を終えて」農業生産科学科 熱帯作物学研究室	学部4年・	. 濵	H	_	期	10
	「教育実習を終えて」農業生産科学科 害虫学研究室						
	「市来農芸高校での教育実習を通して」…農業生産科学科 家畜繁殖学研究室						
	「教育実習を終えて」農林環境科学科 農業環境システム学研究室						
		V A 1		·	, •	.,,,	
留学	本験記						
18.	「アメリカ留学を終えて」農林水産学研究科 農業経営学研究室	修士2年・	Щ	崎	宏	志	12
	「マレーシア生活」農林水産学研究科 植物病理学研究室						
20.	「留学体験記」農林環境科学科 森林政策学研究室	学部3年・	古	里	孝	志	13
	「スウェーデン留学」農林水産学研究科 利水工学研究室						
		•	-	•			
農学	部附属施設紹介						
	附属農場						
23.	附属演習林附属	属演習林長	枚	田	邦	宏	
24.	附属焼酎・発酵学教育研究センター附属焼酎・発酵学教育研究セ	ンター長	髙	峯	和	則	18



コロナ時代、君は何に挑戦するか

鹿児島大学農学部あらた同窓会 会 長 藤 田 晋 輔

今年も間違いもせずに時を刻み、爽やかな秋の気配を感じさせ、大学内の農場でもたわわに実った稲穂も頭をさげる季節になった。年明けに飛び込んだニュース、中国の湖北省武漢の医師同士のチャンネルで「原因不明の肺炎が発生、要注意」と警告したR医師は、デマを流したとして某機関に逮捕・犯罪扱い(後に市民権は復活しました)されました。残念ながら、この医師は自らも罹患してしまい、この世を去らざるを得なかった。新型コロナウイルスは「COVID-19」と命名され、この新種肺炎の罹患者は、世界で3,550万人(死者は104万人)、(10月8日現在)、日本では罹患者87,000人、死亡者1,631名(10月10日現在)と報じられている。人が生活している地の果てまで拡散し、世界を一瞬に巻き込みましたが、先の太平洋戦争後、『第3次世界大戦は細菌戦争』と言われていたことが現実となった…と、思った令和の最初の年明けでした。

幸いに入学試験は出来ましたが、世界中に拡散した新型コロナにより、種々の行事が中止となる中、卒業・修了式、そして、同窓会のイベントの一つである学生諸君との「卒業・修了祝賀会」(農学部とあらた同窓会共催)」も中止せざるを得ませんでした。幸いにも、今年の入試は実施され、新入生を迎えることが出来ましたが、入学式をはじめ、関連する行事がすべて中止となりました。

遅まきながら、令和2年度農学部に入学した皆さん。入学おめでとう。入学式は行なわれず、入学手続き書類の往復だけで、「大学生になった!」という実感がわかない半年であったろうと思います。初々しい諸君は夢見ていた大学の講義も、『COVID-19の感染拡大を避けるため…』と言う理由で遠隔授業。卒業論文・実験、その他農場実習等も中止、在学生も含めて同じ状況である。教員も新入生諸君も未だに辟易とした毎日を送っているに違いない。この半年の学内はまったくゴーストタウン。10月から対面授業が開始される旨を聞いているが、学生諸君の息吹を全然感じていない今日この頃である。

学生諸君の表情を見ながら対面授業を進めると、教員も満足感を感じるが、遠隔授業は顔が見えない一方通行であるので、納得できる学ぶ環境をつくれない。「新聞の声欄」に授業料の返却を求める声もチラホラ。しかし、大学における学びの世界は、義務教育学齢でないことを意識した大人の行動を期待したい。このような時代であるからこそ、受動態でなく、能動態の行動を採るべき年令であるので、何を学び、将来自分にどのような社会(地域)貢献ができるか…を己から探り、学ぶ必要があろう。

ところで、この世に生を受けた時からIT社会で育った諸君の世代は、ITを十分に活かせる能力を所持している。 現在農林水産省は、「スマート農業」(ロボット技術やICTを活用して超省力・高品質生産を実現する新たな農業)の 挑戦と銘打って、国内の多くの地域で実証実験を始めている。この新たな技術開発は、今後の農業の省力化に挑戦 している。この技術は金太郎飴でなく、各地域に適合した技術で進めなければならない。

未来に向けた人間の持続的な生存の鍵を握っているのは農業であると考えている。「科学の範疇である農学」とは「実学」、つまり「体験」を通して展開され、解決することができる。農業の真髄が解らずして、「農学」は究められない。これに対する学理を究めるためにも、まずは諸君の出身地の地域課題発掘を通し、おろそかになっている「実学」を積極的に体験しよう。基礎的な課題意識の体得は、将来のための"One Step"であるので、コロナ対策に振り回されず、無駄な時間としないよう望みたい。



鹿児島大学農学部の地域貢献と人材育成

農学部長橋 本 文 雄

あらた同窓会、在校生の皆様、こんにちは。いかがお過ごしでしょうか?

迎える令和3年度は国立大学が法人化されて中期目標・中期計画期間の第3期目の最終年度となります。鹿児島大学は、地方大学の役割の一つとして「地域と共に社会の発展に貢献する総合大学を目指す」ことを掲げており、また、鹿児島大学憲章の中では「南九州を中心とする地域産業の振興、医療と福祉の充実、環境の保全、教育および文化の向上など、地域社会の発展と活性化に貢献する」ことを目的としております。このような大学の目標・目的を達成するため、鹿児島大学農学部は平成27年度から特に、地域貢献と人材育成に焦点を当て、地域との接点を求め、また、地域のニーズを発掘するため、「地域連携ネットワークプロジェクト」と題して活動を継続中です。

その具体的な活動内容として、○教員が地域を訪問し課題を拾い上げること、○地方と人的にネットワークを形成し、農学部の垣根を低くすること、○地域課題の解決に向けた応用研究を共同で推進すること、○地域の実践的活動を担うことのできる人材を大学が育成するため、その拠点としての認識を高めていただくこと、の趣旨をもって地域の皆様方と協働して課題の解決に当たってきました。いくつか実績をご紹介します。

食品機能科学の分野では、高度な機能解析技術を確立し、鹿児島地域の代表的な植物・動物性食品と発酵産物の健康機能を見出し、中でも「ねじめびわ茶」の機能性について特許取得による事業支援を行い、一方、商標登録された「薩摩黒膳」弁当は2019年の全国お弁当・お惣菜の優秀賞を受賞し、地元の経済効果を上げることに大きく貢献しています。一方、「桜島大根」に血管内皮機能が向上することを見出し、その活性成分が「トリゴネリン」であり、作用機能のメカニズムが明らかにされました。TVやマスコミで大きく報道され、これまで桜島大根の取引の無かった地域への販路拡大など、地域の活性化に大きく貢献しております。応用植物科学の分野では、湧水町での特産果樹としてのアーモンド生産の技術支援、貴重な遺伝資源である奄美群島在来カンキツの積極的な利用と保存のための技術指導、トルコギキョウ F₁切り花の生産技術の支援、化学農薬を使用しない薬草「カンゾウ」の栽培における病害虫管理の技術指導などを行っています。

畜産科学分野ではアイガモ農法向けの新たなアイガモ『薩摩黒鴨』の作出技術の支援、森林科学分野では立木を 伐採し丸太を生産する素材生産事業を支援するガイドラインを策定し事業体の認証を開始、人材育成の面から業界 の底上げを行っています。地域環境システム学の分野では徳之島におけるサトウキビ農業のIoT化と曽於のピーマン 部会のスマート農業によるデータ駆動型栽培管理を支援する取り組みが行われ、人工衛星データと気象データを用 いた調査を試行中であり、徳之島などの離島のサトウキビ生産を支援しています。食料農業経済学の分野では学生 ボランティア組織「農援隊」が農山村自治体の様々な要請に応じて、地域の環境整備のボランティア活動を行って おります。特に最近、霧島市・佳例川地区への援農活動は、お田植え祭の復活再現などの地域祭のお手伝いを行い、 これにより、佳例川地区は2019年度総務省の「ふるさとづくり」大賞を受賞されました。

農学部・大学院修士課程(農林水産学研究科)では、上述の教育研究の取り組み例を勉学・実学を習得する好機と捉え、在校生におかれましてはさらに勉学に励まれて、卒業生・修了生におかれましては、在学中に得られました成果を糧に個々の職場でさらなるスキルアップを図られ、鹿児島県、九州、日本、果ては世界のリーダーとしてご活躍されますよう教職員一同期待しているところです。



遠隔授業どうですか?

農学部FD委員長藤田清貴

国土交通省のアンケート調査ではオンライン飲み会やオンライン授業・講義を今後続けたい方は2割にとどまっ たそうです。急にリモートと言われてもできることなら対面が良いと思っている方が多いということでしょう。私は、 3年生の糖質科学と2年生の酵素化学の前半部分を担当しました。特に酵素化学は初めての担当でいろいろな業務 の中でこなす必要があり、なかなか大変な作業でした。対面が解禁された時、私の授業はオンラインと対面を両方 選べるようにしたのですが、一限目ということもあり圧倒的にオンラインが人気でした。眠いし通学が大変などの 理由でオンラインが人気なのは理解できますが、オンラインの方が集中できると言う学生もいて驚きました。私の 話し方には催眠効果があるらしく、昨年までの対面授業中は多くの方を眠らせてしまっていました。私のオンライ ン授業では顔出しせずミュートですから、熟睡していた方もいるとは思いますが、対面でも寝ているのだからオン ラインで全員が起きているとは思っていませんでした。この状況を改善して起きてもらうようにすることがFDです。 FDとはファカルティ・デベロップメントの事で、授業改善のことです。大学の先生は研究者が教育もやっていると いうスタンスの方がほとんどでして、授業方法を学んだこともなければ、資格を取った訳でもありません。授業内 容も質もバラツキがあるのはやむを得ないことです。そんな授業を改善するために授業参観しましょうとかアンケー トお願いしますとかを言うのがFD委員長の仕事です。今回は、これに加えて遠隔授業やzoomのやり方が分からない 方への世話係もFD関係として担当しました。学生の皆さんも大混乱の中で大変だったことでしょうけど、授業を行 う方の教員側も混乱の中、zoomなりPowerPointのアップロードなりの何らかの対応が要求されました。学生の皆さ んも不満もあったかと思うのですが、思ったよりはスムーズにできたのではないかと思います。manabaとresponが 既に整備されており、遠隔授業がいつでもできる体制ができていたことと、Zoomの性能の良さも乗り越えることが できた理由かと思います。オンライン化に不向きの授業もあったかとは思いますが、授業評価アンケートからは教 員の側も非常事態にうまく対応した方が多かったという評価が見えています。

来年以降、新型コロナが徐々に収束したとして、一度オンラインやオンデマンドのメリットを知ってしまった教員が、昔の姿に"完全に"戻る事はないと思われます。海外に出張していても現地から授業することもできますしね。対面メインになるか併用型かは教員それぞれとなり多様な授業形態になっていくのではと思われます。学生の皆さんもオンライン授業のメリットも感じることができたと思います。今年度は、授業評価アンケートの回答率向上にも取り組んでいます。学生の皆さんにとっては、似たようなアンケートばかり書かされているという不満もあるとは思います。ただ、教員側に授業改善を促すプレッシャーとしてある程度機能します。無記名ですので忖度して高評価つける必要もありません。思ったままを書いてもらった方が後輩の授業改善につながるのではと思います。AIによって半分の仕事が無くなるという説もあります。変化に対応するしか生き残る道はありません。新型コロナで世界が一気に変わることを経験できたこともプラスに捉えて、今後の変化に対応する能力を養うためにも学びを続けていきましょう。

鹿児島大学農学部「あらた同窓会」の活動について

鹿児島大学農学部あらた同窓会 事 務 局

鹿児島大学農学部および大学院農林水産学研究科(農学系)に在学されている学生および大学院生の皆様、日頃から「あらた同窓会」の活動にご協力いただきありがとうございます。中には協力していることを実感できない人もいるかもしれませんが、皆様は鹿児島大学農学部に入学されると同時に学生会員(あらた同窓会会則第5条)になっていただいております。そして、皆さまから入学時にいただいた入会金(学部4年間の会費を含む)という浄財は「あらた同窓会」の日ごろの運営に活用させていただいております。

鹿児島大学農学部は、明治41(1908)年に日本で2番目に設立された高等農林学校(鹿児島高農)に始まり、鹿児島農林専門学校そして昭和24年以降は鹿児島大学農学部へと発展してきました。鹿児島高等農林学校創設の目的は「暖地農業の振興、南方開発および海外移民人材育成など」とされ、その精神は現在の鹿児島大学農学部にも引き継がれております。高等農林学校以降の学部および大学院(修士課程)の卒業・修了生からなる「あらた同窓会」の会員は総数で2万人(物故者を含む)を越えています。卒業・修了生は日本国内だけでなく、世界中で広く活躍されており、ここ「荒田(あらた)の地」に学んだ同窓生として、卒業年次(年齢)を越えた繋がりをもって活動されております。現在の鹿児島大学農学部および大学院農林水産学研究科(修士課程)に在籍される皆様も年齢、国境を越えた「あらたの仲間」として会員どうしの付き合いを進めて欲しいと思います。

「あらた同窓会」の活動としては「会員名簿」 $(4 \sim 5$ 年に1回)の発行に加えて毎年3月の「卒業者・修了者名簿」の発行、年2回(春季号・秋季号)の「あらた同窓会報」の発行、11月23日の「総会」や各県支部会、クラス会などの活動を積極的に支援しております。

今年2月以降新型コロナの影響で、学生・院生の皆様も遠隔授業で勉学されましたが、「あらた同窓会」でも「卒業祝賀会」および「学生向け講演会」は開催できず、「あらた同窓会報」および「卒業・修了者名簿」の発行の活動しかできていません。早く新型コロナが収まって平常の活動に戻ることができるように祈っております。

以下に、学生・院生の皆様に密接に関係する平年の活動について列挙いたします。

- 1. 入学時の農学部オリエンテーションにおいて「あらた同窓会報」などをお届けして、鹿児島大学農学部への入学と「あらた同窓会」入会を歓迎しています。
- 2. 3月卒業、修了時には「卒業者・修了者名簿」と「あらた同窓会報春季号」を発行し、全体の会員名簿(CD版) とともに配布します。また、農学部と共催して「卒業・修了祝賀会」を開催し、その費用について毎年一定額 を補助しています。
- 3. 「あらた同窓会報秋季号(本号)」を学生向け会報として11月23日に発行しています。: 構成内容は学生・院生によるビバキャンパスライフ、教育実習・介護体験・イン

ターンシップ・留学体験記など、学生・院生にとって思 い出に残る記事を掲載しています

い出に残る記事を掲載しています。

4. 学生向け講演会:毎年前期終了前後を目途に開催、卒業 生による報告、留学制度の利用と留学体験報告など、学 生にとってタイムリーな話題で講演を行っています。

在学生の皆様はあらた同窓会の学生会員として、卒業・修 了生の皆様は正会員として、鹿児島大学農学部および「鹿児 島大学農学部あらた同窓会」の「同窓生」という誇りをもっ て社会で将来長く健康でご活躍していただきますよう祈念し ております。



鹿児島高等農林学校校旗

Vival Campus life FIRST STORY Vival Campus life



農業生産科学科

応用植物科学コース



「自己成長の場:鹿児島大学」

果樹園芸学研究室

学部 4 年 窪田 瑛水

私にとって大学生活は、自己成長を促す機会に多く 出会えた日々でした。

きっかけは、大学1年時から参加したかごしまキャ リア教育プログラムでした。このプログラムは、地元 就業を目指す学生に対して地域活性化に貢献できる能 力を育む場となっています。プログラムを達成するた めに、指定された科目を受講して単位を取得するほか、 インターンシップへの参加、さらには成果報告会で鹿 児島大学関係者や地元企業の方の前で発表しました。 従来の講義に加えてこなさなければならなかったため 計画的に進める必要があり、両立するのに苦労しまし た。また、プログラム過程の一環としてではなく、私 が興味を持って参加したインターンシップもありまし た。その場所とは鹿児島市喜入の鹿児島観光農業公園 (グリーンファーム)です。自宅から片道2時間、料 金だと1000円もかかる距離でしたが、約10日間通い 続け課題解決に取り組みました。普通に考えたら行く だけ無駄に思ってしまうのかもしれません。ですが、 私にとってグリーンファームとの出会いは進路を決定 する重要な岐路でした。また、大学1年目の夏季休業 に参加したため、農業に関する知識を深めるとともに 異なる年代の方と関わることでコミュニケーション能 力や協調性を養う貴重な機会となりました。

このように、私にとって大学生活は慌ただしい日々でしたが経験を沢山積み重ねたことで、自分に自信が持てただけでなく責任感や判断能力を身につけ、社会人としての基礎能力を養うことができました。もし、親が大学に通わせてくれなかったら、大学に入っても心優しい仲間や先輩・先生方に出会えなかったら…こんなにも充実した生活を送ることはできなかったと思

います。だからこそ、最後はこの言葉で締めくくります。ありがとう。

審庫科学コース



「我が身を振り返ってみて」

家畜管理学研究室

学部4年 野島 舞葉

私は4年前、知り合いの牧場のお手伝いができるだ ろうという安易な考えで農学部に入学した。

1年目、大学は高校までとどう違うのかと期待を胸に一人暮らしを始めたが講義の時間割を自分である程度決められるということ以外大きな差はなく、少しがっかりした。2年目も然り、農学の専門の講義が増えただけだった。しかし、3年生になると研究室に配属され、研究室の活動が日々の生活の中に加わった。それは研究室で所有している家畜の世話、先輩たちの研究の手伝いなどだった。

当初、全くの一般家庭に育った自分は実際の農作業がこれほど大変だったとは、と身をもって味わった。そして4年目。コロナで新年度が明け、どうなることかと誰もが少し先の将来を危惧していたが、幸運なことに鹿児島はそこまで被害が大きくならず、早い段階でほぼ通常の活動ができるようになった。

そんな日々を経て今、私は自分の大学生活の中で一番充実しているように思う。研究室の仲間と良い関係が築け、自分の研究も時々壁にはぶち当たりながらもなんとか進んでいる。そして何より、前は大変だと思っていた作業が自分で考えながらできるようになったことで楽しくなったのだ。

特に、家畜の世話は毎朝行っており、負担も大きいが、自分が彼らを支えていると思うとどのように彼らの健康を保とうかと考えることが楽しく思えてきたのだ。特に一時期体調が芳しくなかったヤギが元気になってくれた時はとてもうれしかったし誇らしかった。その私のお気に入りは御年9歳になるヤギで、現在どのヤギよりも高齢なそのヤギは、同時にどのヤギよりも体が小さい。私の残りの半年はそのヤギをますます元気にパワフルにすることを1つの目標にしたいとさえ思っている。

大学での学びは大変なこともしんどいこともたくさ んあるが、過去を振り返った時に良い4年間だったと 思えるよう、残りの半年間も続けて精進していきたい。

食料農業経済学コース(国際食料資源学特別コース)



「無題」

農業経済学研究室学部4年福田耕平

鹿児島での短い大学生活が終わろうとしています。 卒業まで半年といったところで、私のこれまでについて書いていこうと思います。あらた同窓会の諸先輩 方をはじめとしてこれを読む方々には、4年間を鹿児 島で過ごした学生の一つのサンプルとしてお読み頂ければと考えております。

私の実家は埼玉の田舎にあります。高校から始めた ラグビーにのめり込み、受験に失敗し、1年間浪人生 活を送りました。その夏頃、私は進路を鹿児島大学へ と決めました。その理由は、一人暮らしがしたかった こと、全く新しい環境で4年間を過ごしたかったこと、 恩師である茨城大の先生が鹿大を推薦してくれたこと でした。私は昔から「海外で困っている人のために働 きたい」という夢を持っていたので、農学部の中でも 国際コースを志願し、無事合格しました。大学生活は とても充実したものでした。大学でもラグビー部に所 属し、かけがえのない仲間ができました。しかし案の 定、部活を始めると勉強は疎かになってしまい、成績 も4年間を通じてあまり良いとは言えない学生だった と思います。講義を受けて行く中で、興味の対象は海 外から日本の農村へと移っていき、これをより深く勉 強したいと考え、大学院への進学を決めました。進学 先は、周りの先生に助言をいただき、東京大学の農政 研究室を目指すことになりました。それから半年間、 ひたすらに勉強を続けました。大学生活の唯一の心残 りといえば、最高学年に上がったのにも関わらず部活 に参加できず、仲間に迷惑をかけたこの半年間です。

しかし努力が報われ、志望研究 室への合格が決まりました。喫緊 の課題は、無事に鹿大を卒業する ことです。また部活にも復帰し、 残り短い期間を仲間のために尽く そうと思っています。

鹿児島は本当にいいところでした。自然が豊かで食べ物が美味し



く、人々が温かい場所でした。この場をお借りして、 お世話になった全ての方々へ感謝申し上げます。

0

食料生命科学科

食品機能科学コース



「私の4年間」

 食品化学研究室

 学部 4 年 木村 桃子

今回この執筆依頼を受けて私の大学生活を振り返ってみると、多くの出会いと学びを経験した、濃密な4年間だったと改めて感じました。

私は、時間を無駄にせず、毎日を充実させたいという想いを常に持っている人間です。この性格もあり、1年生からジャズバンド部に入部を決意、その後3年間、音楽にのめり込む毎日が始まりました。時には練習がうまくいかずに悩むこともありましたが、それゆえ、毎回ライブを終えるごとに込み上げてくるものがありました。たくさんのライブを経験させて下さった先輩方、いろいろあったけど、なんだかんだ最高の同期、ずっとついてきてくれた後輩達など、私を支えてくれる人がいたからこそ作れた多くの思い出は、私のかけがえのない宝物です。

また、私の大学生活を語る上で外せないものがあります。それは、4年間続けている焼肉屋のアルバイトです。高校の先輩の紹介で何気なく入ったのですが、いい意味でクセの強いお店の印象と、その想像を超える忙しさに驚いたことを、今でも覚えています。それでも、ここまで継続出来ているのは、お店を愛し、誇りをもって働いていた先輩方の姿を見てきたからです。卒業後もお客様として食べに来てくださったり、連絡を取って仲良くしていただいたり、本当に愛が溢れる場所だなあと日々感じます。私がここで働き続ける限り、後輩にもこの想いを受け継ぎ、みんなの自慢の場所にしたいです。

現在、私は食品化学研究室に所属し、食品を薬に応用する研究をしています。4年生から本格的に実験が始まり、自身の研究や食と健康に関する勉強が楽しいと感じるようになりました。今後は大学院に進学し、引き続き研究を続ける予定です。親身になって相談に

乗って下さる先生のもと、毎日学業に励むことが出来 ています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これ から始まる2年間の大学院生活も、充実した時を過ご せるよう精進していきます。

食環境制御科学コース



「もやしもん」から

植物栄養・肥料学研究室 学部3年 鬼塚 大雅

僕は現在、食環境制御科学コースの植物栄養・肥料 学研究室に所属している。しかしながら最初、僕は焼 酎発酵・微生物科学コースへの配属を希望していた。 僕が焼酎発酵・微生物科学コースへの配属を希望して いたのは「もやしもん」という漫画の影響だ。その漫 画にはたくさんの微生物がキャラクターのようなポッ プでかわいらしいデザインで出てくる。僕は、その漫 画を読んでいる内に微生物に興味を持つようになって いった。そのため所属する研究室は微生物とかかわり の深い焼酎発酵・微生物科学コースにしようと考えて いた。しかしながら問題が発生した。GPAが足りな いのだ。僕はお世辞にも頭がいいとは言えず、成績表 はほとんどが可で悲惨な有様だった。コース配属には このGPAが重要であり、僕はGPAバトルに負けてし まった。自分の希望していたコースに所属することが できず僕はしばらく意気消沈していたが、研究室の配 属後、自分の研究室の専門分野のことを調べていくう ちに植物栄養・肥料学に興味を持てるようになって いった。今は勉強するのが楽しい。希望していた学問 を専攻することができなかったがそのおかげで新しい 分野への道を開くことができた。人間万事塞翁が馬と いう言葉があるが結局のところ、なにがその人にとっ て得になるのかわからないのだ。転んでどうにもなら なかったことを悔やんでもどうにもならない。それな らば、転んだあとどうすればよりよくなるのかを考え る方が重要なのだ。これから僕は植物栄養・肥料学を 必死に勉強していきたいと思う。「もやしもん」には なることはできなかったが、これからは「こやしもん」 になれるように頑張りたい。

焼酎発酵・微生物科学コース (農林水産学研究科・食品創生科学専攻)



「初めての一歩、 そしてこれからの一歩」

焼酎製造学研究室

修士2年 Christopher Imansantoso Rimba

「僕は日本に留学したい!|

高校時代からずっと日本に留学するのが憧れでした。大学で食品技術コースを学ぶうちに、発酵食品に興味を持ち、卒論テーマとして研究しました。進学にあたり、発酵食品をもっと学びたいと思い、発酵食品の研究が進んでいる、日本の大学に進学することを決めました。大学院を選ぶときに、自分が研究したい内容を基にして論文検索をしたところ、鹿児島大学の吉崎先生の論文を見つけました。さっそく先生に連絡したところ話が進み、吉崎先生が指導教員になって下さり鹿児島大学大学院に入学できました。

新しい環境でうまく活動できるか心配でしたが、新 しいことを数多く発見できました。最初は焼酎のこと は全く知りませんでしたが、学生実験で焼酎製造を学 び、授業で焼酎の歴史や税の知識を得ることができま した。新しい分析方法や分析機器の取り扱いなど新た なスキルが身につきました。

友達の勧誘で鹿児島大学学友会管弦楽団 (オーケストラ) に入部しました。演奏スキルだけでなく、演奏会の準備や部活会議、他のイベントにも参加し日本での社会経験を積むことができました。研究とオーケストラ活動の両方が上達できるように頑張っています! それだけでなく、研究室の仲間やオーケストラの友達ができて、本当に嬉しいです。皆さんのおかげで日本語能力が少しずつ向上しています。これからも、もっと上手くなれるように頑張っていきたいです!

今振り返ると、もしあの論文が見つからなかったら、 もし先生に連絡する勇気がなかったら、この素晴らし い経験ができなかっただろうと思います。鹿児島大

学に入学し、学び、研究し、多 くの友人ができ、鹿児島大学な らではの経験ができて本当に良 かったです。感謝しかないです。 どんな未来が待っているか、想 像するだけでもワクワクが止ま らないです。次の一歩を踏み出 そう!



農林環境科学科

森林科学コース



「秒だった大学生活」

森林計画学研究室学部4年 池沢 愛奈

4年間、学校・バイト・遊び・垂水の繰り返しで、何もない日はほぼありませんでした。秒のように感じる大学生活も振り返れば、4年前の自分には想像できないほど充実した日々を送っています。充実できた理由は大きく2つあります。

1つ目は、やってみたい、行ってみたいという願望を達成してきたことです。長期休みは鹿児島から出て違う景色を観て、いつもと違う体験をする事で日常をリセットできました。楽しかったと思える瞬間が多くあることは、充実できた最大の要因だと思います。最近でいうと、サーフィンやダイビング、シュノーケリングで海を満喫でき夏をエンジョイできました。

2つ目は、サークルに入ったことです。学校とバイトの往復だけの生活を変えたくて、2年生の時から活動し始めました。サークルでの人との出会いは衝撃的で、サークルに関わる大人、先輩後輩は挑戦してみたいことにはどんどんチャレンジして、自分のやりたい事に全力でした。そんな人達に刺激を受け、他の人にとっては小さな事かもしれませんが、私にとっては大きな経験をする中で学びがあり、自分自身を知ることができたように感じます。

遊びでも勉強でも、何かに全力で取り組むこと。その過程で楽しいこと、辛いこと、泣いてしまった日もありました。でも、全力を出した達成感から次への挑戦へと進むことができ、共に努力した仲間はかけがえのない存在となりました。"戻るならいつがいいかな~?"そんな話を最近よくします。戻りたい瞬間を一緒に作り上げてくれた人たちに心の底から感謝を伝えたいです。

最後に、私は学校に行くためにまず15分自転車を 漕ぎます。そして50分ほど電車に揺られ、中央駅到 着後、また自転車を漕ぎます。計約90分かけて大学に 到着します。本当に遠かったです。大学生活は秒でし たが、通学時間は激長でした。7年間電車通学を続け た私を誰か褒めてほしいです。(笑)

地域環境システム学コース



「嗚呼素晴らしき台所」

農業環境システム学研究室 学部 4 年 清水 雪天

おいしいものを食べることが大好きだ。肉、魚、野菜、お菓子…。ほぼ好き嫌いなく食べる。

そんな私が鹿大に入学し、一人暮らしを始めて何と 言っても困ったのが料理である。これまでは、家で座っ ていれば食事が出てきた。しかし、これからは自分で 作らない限り空腹は満たされないという現実に打ちの めされた。

仕方なく包丁を握り、見よう見まねで料理を作って はみたが、ここでもまた壁にぶつかることになった。 「まずすぎる」。目の前の物体は一見「肉じゃが」だが、 芋は生煮えで味も染みておらず、とても食べられるも のではなかった。

さらに北国育ちの私に、鹿児島の暑さが追い打ちを かけ、外食に出かける気力まで失われていった。

これではまずいと、失敗しながらも料理に取り組む うち、今では自分の思い描く料理を作れるようになっ た。肉じゃが、唐揚げなどの家庭料理はもちろん、カ オマンガイやバターチキンカレー、バナナケーキもお 手のもの。帰省したときに作ると家族からも好評だ。

今年の春には秘密兵器のハンドミキサーも手に入れた。暑い夏もコロナもスイカのスムージーやビシソワーズで乗り切ることができた。

新しいメニューの探索にも抜かりはない。クックパッドなど料理サイトは欠かさずチェック、「きのう何食べた」も私の参考書だ。

「勉強にも同じくらい熱意を注げばいいのに」などと言うのは野暮というものである。「医食同源」「衣食足りて礼節を知る」。食は昔から人間が生きるために最も大切なものなのだから。

さて、そんな大学生活も多分残り半年(末吉先生、 大丈夫ですよね?)。卒論実験の進みは遅いが、私の 料理の腕前は着実に上達している。

最後に自炊生にアドバイス。レシピの調味料の分量 は大抵味が濃すぎます。まず半分の量を作ってから 徐々に足していくのが失敗しないコツです。



国際食料資源学特別コース(農学系サブコース)



「自分革命から深い感謝の気持ちを 持ち生きている」

熱帯作物学研究室

学部3年 NGU YÉN THÍ THỦ HÀNG

自分のこと(体・気分・健康)を大事にする

日本へ来る前は食事時間が不規則でずっと睡眠不足の状態という最低な生活習慣だった私は2年経って健康な生活が出来るようになったのが一番良かったことだと思う。1年目は本当に体調が悪く生き続けられるか分からないくらいつらく、しょっちゅう病院に通っていた。しかし、そのおかげで、健康ほど幸せな事だと言うことがよく分かり、「自分革命」を行うことにした。22年間自分に付いた悪い習慣を変えるのは正直に一番激しい争いだった。毎日2時間運動(朝ヨガと筋トレ・夜ランニング)と早寝早起きを自分に果たして、結局半年6キロ痩せて、食事も週末にちゃんと作り置き、掃除もきちんとすることになった。新しい自分に凄く満足でこれから幸せな生活を送れると信じている。

自分の考え方、見た方が変わった

海外で初めて来たのは鹿児島県。2年生になり、アンバサダーとして市の魅力を紹介する役割を引き受けたおかげで、あっちこっちへ行けて市の文化や特産や美しさを理解するともに国際交流の珍しいチャンスにもなった。大学のプログラムでホームステイも体験して、日本人の実生活も楽しんだ。また、国際コースなので、インドネシア海外研修も行って、自分の世界は広く開かれた。国際交流を通じて、勉強になったのは価値観の違いを受け入れ、違う意見も取り入れて理解することが大事なこと。

お肉屋さんとコンビニなどのバイトも1年間やった。よく筋肉痛がひどくなり、自分のお父さんの大変さも理解出来て感謝の気持ちが高まった。

自主栽培という授業を取って、先生たちの教えと助言を頂き、初めて自分の菜園を作ったことが何より嬉しかった。収穫した美味しいスイカは熱帯作物の自分の研究室の皆さんと一緒に食べて良い思い出になった。

これから自分を磨き続け、昨日の自分にまけないよ うに頑張りたいと思っている。

メモリー 2分立つ生悲の奴除、佐殿塾、

~進路・就職に役立つ先輩の経験・体験談~

教育実習奮闘記



「母校での教育実習を終えて」

農業生産科学科 応用植物科学コース 熱帯作物学研究室

学部 4 年 濵田 一期

コロナ禍の大変な時期に、6月1日から母校での2 週間の教育実習をさせていただきました。

迎えた初日は懐かしい体育館で、生徒・先生方の前で挨拶を行いました。壇上に上がった瞬間、不安と緊張・責任・期待に応えたい思いに押しつぶされそうになり、これからの2週間これらを背負って過ごさなければならないのか。とマイナスな気持ちになってしまいました。

しかし、人懐っこい生徒が多く気軽に「濵田先生!」と声をかけてくれたり、実習や授業を通してよくコミュニケーションをとることができたり、先生方からは職員室などで懐かしいお話や励ましのお言葉をいただいたりと日が経つにつれてマイナスな思いは、次第に楽しさとやりがいに変わっていきました。

研究授業に向けては校内で学力や学習姿勢に大きな 高低差があり、実習に関しても非農家の生徒が多く授 業を行う際のレベルの設定には大変苦労しました。高 すぎても低すぎても生徒の学習意欲を50分間維持さ せることは難しく、導入でいかに生徒を授業に引きこ むことができるかを意識する必要がありました。

教材研究や指導案作成をするにあたり、授業参観をさせていただいた際、今まで生徒の目線で授業を受けていましたが、教師の目線で授業を見ていくと、今まで気づかなかった授業の展開方法や時間配分・生徒たちの目線などが重要であることに気づかされました。

迎えた研究授業当日は身近な話題から生徒を引き込み、PPTを活用し生徒の目線を前に向けさせ授業の理解度を高めさせることができたと思います。また、落ち着いた話しぶりで聞きやすく、進路活動や課題研究などに関連付けた一貫性のある授業を展開することができていたとお褒めの言葉もいただき、充実した2週間を締めくくることができました。多くの方々に助けられ励まされたこの2週間の出会いと経験を糧にこれ

からも精進していきたいと思います。







「教育実習を終えて」

農業生産科学科 応用植物科学コース 害虫学研究室

学部 4 年 角田 謙信

2週間の教育実習を終えて、短い期間ではあったが 先生方からのご指導や生徒との実習等を通して貴重な 経験が出来た。

研究授業では、お茶の栽培管理について座学で2回 授業を行った。今回の授業の目標として、生徒が積極 的に発言する機会を設けて活気ある授業にしたいと考 えていた。しかし初めて授業を行うということでとて も緊張し、その緊張が生徒にも伝わってしまったのか 生徒からの反応が少なかった。生徒は先生の姿や立ち 振る舞いをしっかりと見ているので、余裕をもって授 業を行うべきだった。また、授業の進むペースが想定 していたよりも早く進んでしまったため、チャイムよ りも早く終わってしまった。その理由として考えられ るのが生徒との対話が少なかったためだと考えられ る。授業の導入では前回の授業の確認や問いかけるこ とで生徒に発言する機会をもうけていたが、その後の 展開では講義スタイルの授業になってしまい生徒に発 言をさせる機会が少なくなってしまった。このように 初めて生徒に対して授業を行ったが、なかなか思うよ うに展開できずに自分自身の課題が多く見つかった。

座学の授業以外では、農業の実習や部活動等にも参加した。一緒に圃場の作業や部活動に取り組む中で、例えば座学ではあまり意欲的ではない生徒が、主体的に作業に取り組んでいたりと教室の中では見られないような違った一面を発見することが出来た。生徒それぞれに個性があり、それを理解するためには様々な機会を通して生徒に関わっていくことの重要さを学んだ

コロナウイルスで大変な状況の中で実習を受け入れてくださって指導や支援をしていただいた先生方、まだまだ未熟な自分に対して「先生」と生徒が呼んで慕ってくれたことで、この2週間で少しは「先生」に近づくことが出来たのかなと感じた。



実習風景の写真



「市来農芸高校での 教育実習を通して」

農業生産科学科 畜産科学コース 家畜繁殖学研究室

学部 4 年 池田 佳穂

私は6月1日から12日までの約2週間、教育実習で鹿児島県立市来農芸高等学校に行ってきました。今年はコロナ感染症の流行により、多くの学校が教育実習を延期している中、市来農芸高校では私たち教育実習生を受け入れ、いろんな経験をさせていただいたことで充実した教育実習生活を送ることができました。

初日の朝、校門の前でたくさんの生徒が元気な挨拶で迎えてくれ、とても嬉しかったことを覚えています。 初日はオリエンテーションがあり、普通高校出身の私にとって農業高校の雰囲気やシステムのすべてが目新しいものでした。教育実習を上手くやれるか不安でしたが、担当クラスの生徒たちが笑顔で交流してくれたおかげで期待へと変わりました。

私が担当する研究授業は「LHRの進路指導」と「養 鶏」でしたので、指導して下さる先生の授業を拝見し、 授業の学習指導法を学ばせていただきました。先生方 の生徒に対する細かな気配り、生徒が興味関心を持ち やすくするための授業展開の仕方など、私自身が生徒 だった頃には気付かなかったことを教育する立場に なってたくさん気付かされました。先生方は、生徒が 思う以上に生徒のことをよく見ておられることを実感 しました。これらのことは、私が研究授業の準備や実 際に授業をする際に最も意識した課題となりました。 生徒の作業スピード、理解度を確認しながら適当な時 間配分で授業展開することを考え、授業の内容はでき るだけ少なくし、生徒が理解して内容についてこられ るように精一杯丁寧に授業をしました。研究授業で担 当したクラスの生徒のみんなから「とても分かりやす く、楽しかった」と言ってもらえたので、頑張って授 業計画を立てたことへの達成感がありました。

2週間の教育実習を終え、お忙しい中、時間を割いて懇切丁寧に指導して下さった先生方、そして真剣に授業を受け、楽しく交流してくれた生徒のみなさんに心から感謝しています。今回の教育実習での貴重な体験からたくさんのことを学び、物事を相手の立場になって考え行動することの大切さも再認識できたので、これらのことを忘れずに残り大学生活、さらに大学卒業後の生活にぜひ生かしたいと思います。



「教育実習を終えて」

農林環境科学科 地域環境システム学コース 農業環境システム学研究室 学部 4 年 野中 大誠

9月上旬より2週間、地元の高校で教育実習を行いました。母校という事もあり、緊張や不安はなく生徒と触れあうことを楽しみにしていました。2週間という期間は、これまでに感じたことがない早さで過ぎていき、非常に濃く有意義な時間となりました。

私が担当した3年生のクラスは男子が9割を占め、個性豊かで非常に活気のある元気なクラスでした。教育実習期間はクラス内での問題が発生し、丸1日を使った緊急クラス個人面談が実施されたり、担任の先生が学校中に響くような大きな声で怒ったりなど、教師を目指す私にとって非常に勉強になる出来事が沢山ありました。この実習期間中に感じたことは、すべての先生方が"生徒を第一に"と考えて行動していたことです。職員室では常に生徒の話で持ちきりで、一人一人の生徒のことを自分の子供のように思い、たくましく育てようという一心で取り組む姿が印象的でした。

研究授業は大学で専攻していない分野でしたが、自分なりに理解し授業の展開を考え、先生方の授業見学からヒントを見つけ本番に臨みました。当日は校長先生・教頭先生が授業を見学され、多少緊張はしたものの、生徒の発言を引き出し深掘りすることによって、クラス全員で授業を作り上げることが出来ました。また技術の向上に悩む部活動生や、進学先に不安を持った生徒とも何度も話し合う機会があり、私が体験した部活動での思い出や教師を目指すようになったきっかけなどを話すことで、生徒たちに少しでも役に立つアドバイスができるよう努めました。

実習先に赴任してすぐは「先生」と呼ばれることに違和感があり、恥ずかしいとすら感じていました。しかし、日がたつにつれ段々と慣れていき、「先生」と呼ばれるこ

とにいつしか心地よく感じるようになっていました。教育実習で明確となった課題を残りの大学生活で解決し、 自分のスキルを向上させていきたいと思います。



留学体験記



「アメリカ留学を終えて」

農林水産学研究科 農林資源科学専攻 農業経営学研究室

修士2年 山崎 宏志

無事8か月間のアメリカ留学を終えることができた。 今回の留学では、大学の交換留学制度を利用し、ジョー ジア大学に在籍した。前期は語学学校に参加し、後期か ら大学で会計学と経済学の講義に参加した。

結論から言うと、私の留学は信じられないほどに上手くいきすぎた。勉強面では、鹿児島大学の留学生係から厳しいと言われた前期だけでの語学学校の卒業を果たすことができ、後期からの大学の講義ではコロナで途中帰国するまで評価Aをキープし続けることができた。また、生活面ではトルコ人のルームメイトとニューヨーク、ワシントン、ヒューストンなどへ旅ができ、クリスマスにはアメリカ人の友達が実家に招待してくれ、映画で観てきたアメリカのクリスマスを経験できた。とにかく毎日がとても充実していた。アメリカで知り合えた友達には本当に感謝している。

そんな中、新しい価値観を持った。それは、海外から見た日本を意識するようになったことだ。その背景には、海外の人の日本に対しての意見に誇りや責任を感じたことがある。例えば、私が日本人だと言うと、「日本人はいい奴が多い」など海外の人達は日本に対して良いイメージを持っていた。そして、このことは慣れない土地で良い人間関係を構築するのにとても役立った。しかし、同時に私自身が海外の人達が言うような立派な日本人なのかと不安にもなった。そこで、海外の人達が抱いている良い日本や日本人像は、過去の日本人の様々な功績のお

かげだと考えるようになり、感謝するようになった。また、これからも日本を良くしていく責任が私達にはあると感じた。そのため、私も先祖達のように日本社会に貢献し、世界に良い影響が与えられる仕事ができれば幸せだと現在考えている。

最後に、充実した留学生活を送れたのは、友人や先生 方のご協力があったおかげだ。そして、何よりも支えて くれた家族のおかげである。本当に感謝しています。あ りがとうございました。







「マレーシア生活」

農林水産学研究科 食品創成科学専攻植物病理学研究室

修士2年 中村 康史

大学で農学を学ぶ中で、鹿児島特有の亜熱帯気候を生かした農業に興味を持った。そこで、熱帯地域の農業及び、自分の専門である植物病理学を学びたいと思い、文部科学省主導の官民共同プロジェクト「トビタテ!留学 JAPAN日本代表プログラム」の派遣留学生としてマレーシアのプトラ大学へ留学した。

私が通っていたプトラ大学のメインキャンパスは、郡元キャンパスの約28倍で広大な農場があり、多種多様な熱帯作物が栽培されていた。授業は、その広大な農場を生かしたフィールドワークが中心で熱帯作物の様々な病害について学ぶことができた。

また、留学中はきつい経験もした。所属する研究室の担当教員との1回目の面談で、持ち込んだ研究テーマを断られてしまったのだ。不測の事態にものすごく落ち込んだが、なんとかテーマを決め直し研究を行うことができた。他の研究室のメンバーと協力しがら研究を進めていく中で、異文化の中でも積極的かつ誠実にコミュニケーションを取ることで信頼関係を築けることを学ぶことができた。

また、学業以外でも様々な貴重な経験をすることができた。特に大学対抗のサッカー大会に出場したことは、 異文化のコミュニティに所属する上で大切な教訓を得た 良い経験となった。チームメイトは主張が強く、委縮していると全く相手にされないような雰囲気だった。そんな中で過ごしたことで、自分の意見を主張することの重要性を体感することができた。

異国の地でマイノリティーとして生活していく中で、うまくいかないことが多く、落ち込むことも多々あったが、そのおかげで、普段日本で自分を支えてくれている家族や先生方のありがたさを改めて感じることができた。生まれてからずっと鹿児島で育った私にとって、留学は毎日が刺激的で、学業、考え方などあらゆる面で成長できたと感じている。研究室の先生方をはじめ、トビタテ、留学生係など今回の留学をサポートしていただいた全ての方に感謝している。





「留学体験記」

農林環境科学科 森林科学コース 森林政策学研究室 学部 3 年 古里 孝志

2019年8月から2020年3月までの間、ブラジルはアマゾナス州、アマゾン川が流れ、多くの動植物が生息するマナウスに位置するアマゾナス連邦大学(UFAM)で留学を行った。UFAMへの留学はトビタテ留学JAPAN制度を用い、鹿児島大学の協定校への交換留学及び現地でのインターンシップという建て付けで行った。

今回の留学では環境に優しく、森をつくるといわれる 「森林農業」について学ぶために、その農法のメッカとも 言えるブラジルでの留学を選択した。

UFAMでは、森林農業に加え、農業経済学や農地測量学などの講義を受講した。それらは全て現地の公用語であるポルトガル語で行われていたが、私自身は本格的にポルトガル語を学んだ経験がなかったため、専門的な講義を理解するのには大変骨が折れた。しかし、クラスメイトや先生とのコミュニケーションを積極的に図り、周りからのサポートを受けられるように努め、なんとか理解することができた。この時に、「待っていても何も変わらない、自分自身からアクションを起こさなければ何も

変えることはできない。」と強く感じ、そこからより主体 的に行動を起こすようになった。

次に、長期休暇の間にインターンを行った。インター ン先は、パラ州トメアス と呼ばれる、現地で多くの日系 人のコミュニティができている地域で、森林農業を行う 現地の農家でホームステイを行った。そこでは、現地労 働者とともに働き、朝から晩まで汗を流し、実践を通し て森林農業を学ぶことができた。また、ホームステイを 通して、ブラジルの農村地域の貧困を肌感覚で感じ、私 自身の中で初めて、社会問題に対して強い関心が生まれ た。この関心を、ただの関心で終わることがないように、 問題を深く追求し、何かアクションを起こしたい。

その後、インターンを終え、来期のUFAMでの学習の 準備を行なっている最中、それは突如起こった。コロナ ウイルスの感染拡大である。これにより、私は当初1年間 であった留学の予定を短縮し、急遽日本への帰国を余儀 なくされた。ようやく、言語や生活に慣れ、余裕が生まれ、 これからさらに頑張っていこうと思った矢先の出来事で、 私自身このエネルギーをどこへ向けたら良いのかわから なかった。帰国後鹿児島大学に復学し、前期はオンライ ンでの講義を受け続けたが、人に会う機会が少なく、イ ベントも何もない状況で、代わり映えのしない日々はあっ という間に過ぎ、気付いたら前期が終わっていた。そして、 2020年9月現在もコロナウイルスの感染終息の見通しは 立っていない。

アフターコロナと言われる時代では、大きく社会の有 り様が変わっているであろう。今後、就職活動を行い、 社会に出ていくことを考えると、私自身非常に不安であ る。けれど、ブラジルでの、アマゾンでの、日本と何か

ら何まで異なる環境 の中で過ごした経験 は私に勇気と自信を 与えてくれる。それ を糧に今後も、頑 張っていきたい。





「スウェーデン留学」

農林水産学研究科 環境フィールド科学専攻 利水工学研究室

修士2年 森田 くるみ

2019年の8月から約半年間スウェーデンへ交換留学を し、コロナウィルスが日本全国で流行し始める直前に留 学期間を終え、帰国した。思えば、この留学は最初から

本当に素晴らしい幸運に恵まれていたと感じる。それは 出国前から始まっていた。8月初旬の出発日朝、搭乗手 続きカウンターの方から、ビジネスクラスへの無料アッ プグレードを打診されたのだ。やらないわけが無い。唐 突すぎる幸運に感謝して、狭い席で耐えなければいけな かったはずのフライト10時間を、フルフラットの席で片 手にシャンパンを持ちながら優雅に過ごしたのだった。 そんな幸先良すぎるスタートで始まった私の留学生活は、 ここでは書ききれないほどに濃かった。

私の留学は環境がテーマであり、SDGsに関する授業 を中心に学んだ。他にも、環境配慮の生活がスウェーデ ン社会へ浸透した背景を学べるのではないかと思い、ス ウェーデン文化の授業なども幅広く受講した。大学での 学びは、今までの理数的な思考だけでなく、人文学や社会、 経済といった知識も多く要求され、専門の分野に縛られ ず学ぶことは刺激が多く非常に興味深かった。授業があ る時期は図書館に朝から晩までこもらないといけない程 本当に良く勉強したが、遊びも充実していた。テストが 終わると大学構内にはフェス並みに大きなステージが設 置され、重低音響く音楽と共に飲んで踊って、よくイメー ジする海外の大学そのものを体験した。

勉強も遊びも全力投球な留学生活を終えた今、私は燃 え尽きたわけでも無く次のステップに向けて前向きな気 持ちだ。これも、留学での貴重な経験のおかげだと思っ ている。留学中全てが今までの日常と違う環境のなかで 自分自身についても見つめ直すことができた。留学で得 られたことは数え切れないほど多く、快く迎え入れてく れた方々、送り出してくれた方々、周囲の皆さんのおか げだと、とても感謝している。今後は、留学生活で学ん だことを存分に生かし、日々精進していきたい。



同じコースの友人達



overall inauguration で伝統の汚し合い

農学部附属施設紹介

附属農場

農学を学び、農業を理解するためには講義で得た知識だけでは十分でありません。講義で学習した理論を体験して実践すること、つまり自分自身で植物を栽培したり家畜を飼養することが不可欠です。大学における農業実践の場として附属農場は設けられています。鹿児島大学農学部附属農場では植物の栽培や家畜の飼養に適した場所に施設を配置しており、温帯から熱帯にわたる幅広い農業・畜産業を実際に体験して学習することが可能です。

各施設の特徴は以下の通りです。

学内農場農事部:大学の郡元キャンパスの市立病院側にあります。皆さんにもっとも身近な農場で、日ごろ農作物の成長を目にしていると思います。主に、イネやイモなどの作物、タマネギなどの野菜、トルコギキョウなどの花を栽培しています。キャンパス内にあるので、非常に利用頻度が高いです。

唐湊果樹園:大学の南西約2Kmに位置しています。高台にあるので、自転車では行きは辛いですが、帰りはとても楽です。ほとんどが露地で、カンキツ、ビワ、アボカドなどの常緑果樹、カキ、モモ、ブドウ、ブルーベリーなどの落葉果樹を栽培しています。

指宿植物試験場: 鹿児島市から約45Km南の指宿市に位置します。大きな特徴は温泉熱を利用して、ガラス温室やビニルハウスを加温する点にあります。これら施設を利用して、マンゴーやスターフルーツなどの熱帯性植物を主に栽培しています。また、宿泊実習のための宿泊施設も完備しています。

入来牧場: 鹿児島市から北に約30Kmの薩摩川内市入来町にあります。標高約500mの高原に位置し、約150ha と農場施設としては最大の規模を誇ります。約200頭の黒毛和種(和牛)を飼養しています。面積のほとんどが 放牧地や採草地です。宿泊施設は昨年改装され、快適に宿泊実習ができるようになりました。

学内農場畜産部:郡元キャンパスの農場内にあります。畜産関係の学生実習に利用されています。防疫のため、 関係者以外立ち入り禁止です。

また、附属農場は農業技術を学ぶ場としてだけでなく、新たな農業技術や品種の開発、遺伝資源の保存など様々な目的で利用されており、農学部の教育研究において極めて重要な役割を果たしています。

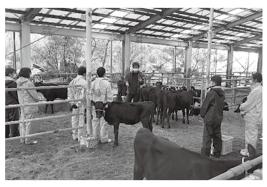
(附属農場長 山本 雅史)



自主栽培実習における野菜栽培(学内農場)



農業機械類操作実習(学内農場)



入来牧場における牛の管理実習



宿泊施設 (入来牧場)

附属演習林

農学部附属演習林は、3,066haであり、本学が所有する土地の大部分を占めています。しかし、農学部附属演習林(高隈演習林、佐多演習林、桜島試験地、唐湊林園等)で実習、卒論研究のために行ったことがあるのは、学科の概論、林学、森林科学の実習で利用したことがある一部の学生だけでしょう。

演習林は、当初は、大学(昔は高等農林学校)に林学を学ぶために入学してきた学生に林業技術を学ばせるための実習することが主目的でした。また、広大な森林に人工林を育てて大学の収入となるような財産を形成することも目的としていました。演習林は、社会との関係は薄く、大学の中での活動であり、実際に利用した人以外はあまり知らない存在でした。演習林の役割は、毎年卒業している林学、森林科学を学んだ学生を送り出していくことであったといえましょう。

しかし、1990年以降、国内農林業生産の衰退の一方で、一般国民の森林に対する期待が公益的機能(水源涵養、土砂防備、二酸化炭素吸収他)になり、現在ある森林を管理して、様々な期待に応えていく必要があります。森林の多面的な機能を発揮するための森林を管理するための能力を有する技術者を養成が求められるようになりました。1990年から2005年ごろまでは、学生に森林のなかでの様々な活動を理解させる実習であったかもしれません。

ここ10年間で林業に関する状況は、大きく変わりました。育ててきた人工林が大きくなり、木材収穫の時期になってきたこと、国内資源を利用した木材需要が拡大したこと、大型の機械が林地の中に入り機械化が進んだことから、現在ある人工林に対する積極的な働きかけをしようという状況になりました。以上のようなことから、以下に述べるように、演習林で新たな取り組みをするようになりました。

第一に、高性能林業機械を導入し、新たな技術を学生に教育するとともに、毎年の成長した人工林から間伐、主伐により丸太を生産しています。これには、演習林のスタッフとして岡 勝教授が赴任されたことが一つの要因となっています。2007年度からは、社会人向けの林業生産専門技術者の教育プログラムを実施し、毎年10名前後のメンバーを対象に教育を実施し、鹿児島大学の社会人教育の一つの姿を提示するとともに、林業人材育成の拠点として林業界で認知されるようになりました。第二に、上述したように森林に対する期待が多様化することにより、森林の中での教育にも変化がありました。ほとんどの子供が、森林を利用する、遊ぶということがなくなって人と森林との関係が希薄になる中、子供たちに森林を理解、体験してもらう森林環境教育の活動が1999年からはじまりました。はじめは一般向けの公開講座の実施、さらに、共通教育科目として自然体験の実施、環境教育の実習等が農学部の森林を学ぶ学生だけでなく、全学の学生を対象に行われるようになりました。これを推し進めてきたのが、演習林スタッフである井倉洋二准教授であり、講義・実習だけでなく、自然体験、農山村体験活動を行うサークル活動も始めました。

以上のように、ここ10数年行ってきた演習林の新たな活動を基盤にして、2013年度より全国の大学の教育関係共同利用施設として文科省に認定され、林業技術者教育、森林環境教育等に関する講義、実習を受け入れ、毎年のべ500人を越える他大学の学生が利用するようになりました。しかし、本年度は新型コロナウイルス感染のため、宿泊を伴う実習の利用人数は、定員の半分(20名程度)となり、もともと実施してきた森林技術者養成のための宿泊実習もできない状態にあります。今後とも感染が引き続くことを考えると、施設の拡充整備や利用方法について工夫が必要となっています。

同窓生の皆様には、本施設の発展のため、今後ともご支援、ご助力をいただくこともあると思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。なお、卒業生の皆様の施設利用も歓迎いたします。お気軽にお声をおかけください。

(附属演習林長 枚田 邦宏)



スギ人工林木の前で



子供向け森林体験学習(渓流探索)



路線測量実習風景

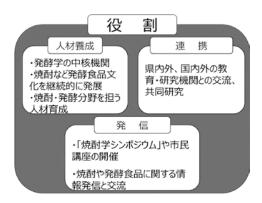


学生実習 (間伐材の搬出)

附属焼酎・発酵学教育研究センター

附属焼酎・発酵学教育研究センターは、平成18年4月に設立された 焼酎学講座の焼酎製造学部門と醸造微生物学部門に加え、新たに発酵 基礎科学部門と発酵文化学部門を設置し、平成23年4月に設立されま した。詳細は当センター HPを【焼酎発酵学】で検索して下さい。

焼酎・発酵学教育研究センターの役割: 鹿児島における発酵学の中核機関としての機能を担い、鹿児島の誇る焼酎を始めとする発酵食品文化を継続的に発展させ、これからの焼酎・発酵分野を担う人材の育成を目指しています。また、県内外、国内外のさまざまな教育・研究機関と連携をとり、情報発信、共同研究の推進に務めています。更に、「焼



酎学シンポジウム」やさまざまな市民講座の開催し、焼酎や発酵食品に関する情報発信を行うとともに交流を深めています。

焼酎・発酵分野を担う人材の育成:原料生産から商品開発まで体系的に学んでいます。作物学やサツマイモ栽培実習をとおして、原料生産について学びます。また、焼酎製造学や醸造微生物学、排水処理論などをとおして、焼酎や発酵食品の製造について学びます。更に、発酵食品機能学や実践経営論、ビジュアルデザイン演習などをとおして、商品開発に必要な知識などを学びます。ビジュアルデザイン演習で作成したポスターが鹿児島県美術展で入賞3回、二科展準入賞1回の実績があります。また、大学ブランド焼酎の開発も行い、焼酎

学10期到達記念の芋焼酎「北辰蔵だより10(てん)」や、農学部の学生が主体となり、 山口大との共同プロジェクトでサツマイモの栽培や、収穫、銘柄の命名、ラベル の開発と選定を行い商品化した「薩摩熱徒」などがあります。

連携・交流:海外との連携・交流も積極的に行っています。中国四川省にある四川大学錦江学院から、毎年2名の学生が交換留学生として1年間留学しています。その他、韓国1人、インドネシア2人、タイ2人、中国38人、台湾1人、ベナン1人の留学生を受け入れています。また、韓国の大学教授や研究者も受け入れた実績があります。



情報発信: 焼酎や発酵食品に関する内容や、私たちの研究成果を広める目的で、焼酎メーカーや発酵食品メーカー、 一般市民を対象にした焼酎学シンポジウムを毎年1回開催しています。毎回200人近い聴講者がいます。

(附属焼酎・発酵学教育研究センター長 髙峯 和則)





附属焼酎・発酵学教育研究センターの建物(北辰蔵)

編集後記

新型コロナは今後も予断を許しません。授業も遠隔となり、アナログ人間の私などZoomでの授業では、学生さんの反応が分からず、なじめません。先日、たまたま手に取った本(「大河の一滴」五木寛之著、幻冬舎文庫)に「面授」という話が載っていました。人と人が向かい合って、息遣いの聞こえる距離で何かを学び、何かを伝え、何かが伝えられることを言うそうです。「これは、思想、学問、信仰などは、人が手の届く距離で向かい合って、肉声で伝えられてこそ初めて伝わるという考え方によるものであろう。」とも書かれていました。わが意を得たりのこの本は、これ以外にも今のような状況を予想したのではないかと思われる内容が満載です。ぜひ、ご一読ください。

(文責 附属農場 遠城 道雄)

鹿児島大学農学部あらた同窓会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目 2 1-2 4 TEL・FAX 0 9 9 (2 8 5) 8 5 3 7 e-mail (aratakai@mc2. seikyou. ne. jp) 振 替 ロ 座 0 2 0 1 0 - 2 - 8 7 6

事務局の業務日 月・水・金(10:00~16:00)

印 刷 所 株式会社鹿児島新生社印刷 住 所 鹿児島市七ツ島 1-3-21

> T E L 099-261-0111 F A X 099-261-3100

E-mail kagoshima@shinsei-p.co.jp





学生による自主栽培航空写真(学内農場農事部)